

STAGE

AMUSEMENT SQUARE

演劇空間「スペースベン」

アツイ鼓動を感じたい

〈文／「創造集団パノラマ屋」お頭・安達良春〉

創造集団パノラマ屋。

集まりである。

さて困った。いったい何人の人がこの名前を知っているだろう。説明したいのはやまやまだが、うまい言葉が見あたらない。宗教団体でもないし、政治団体でもない。営利団体でもチームでもない。うーん……。

「あらゆる創作活動へのお手伝い」を合言葉に平成五年に旗上げ。以来、各種イベントのポスターやチラシのデザインから印刷、スタッフの手配まで自費出版の企画から発行まで、各種舞台公演の裏方、果ては出演まで様々な事をしてきた。テレビのCMに出たりしたこともあった。なんだかますます訳がわからなくなってしまうが、とにかくそういう事をしていく。集団と呼ぶにはあまりにも統一性のない輩の

生きていれば様々な発見、出会い、別れがある。そんな中で、スペースベンを知った事、イージーシアター我楽多屋と出会った事はかなり大きなカルチャーショックだった。「あついで」のである。熱いし、厚い。クールなふりをしていても近づけば熱い。何気ないふりをしていてもぶつかれば厚い。こんな人達が自分と同じ街に住んで、同じ空気を吸っている。人は楽に生きていきたいと願うものだ。なのに何故わざわざ自分から演劇という恐ろしくエネルギーを必要とするものを創ろうとするのか。そう思わずにはいられなかった。陳腐な言葉ではあるが、きつと彼らをつき動かす「何か」を、それぞれ

が持っているのだ

十二月にイージーシアター我楽多屋が、秋の陣「楽」と銘うって、マンズリー公演をFANSで行い、大盛況だった。これまでの本公演とは一味違った作品が並んだ事もあり、新たに役者の個性が見え隠れする、興味深い舞台に仕上がっていた。舞台を創ったり観ていて面白さというのはいろいろあるだろうが、様々な個性がぶつかりあってそのうえで一つの作品にまとまっている、という事が一つある。ならば、ぶつかりあう相手が、ものが無かったらどうなるだろうか。創る側も観る側も舞台を創る、芝居を観るというよりも、「役者（つまりは自分自身）」を観せる、観る」という事になってくる。もちろん出演者にとっては大きな賭けになる。そして、ハイリスク、ハイリターンであればある程、観る側も引きこまれてゆく。

「そんなたいした事をしている訳じゃないよ」。きつとその通りだろう。手をのばせば届きそうな距離で、一人の人間が呼吸をしている。動く、話す、笑う、泣く、怒る。毎日極普通にしている「生きる」という事だ。ただ、それを実感できるチャンスがなかなかないだけの事だ。一月に上演されるFANS一人芝居マンズリー。これを観に来て下さるお客さんごもつ感情が喜怒哀楽どれになるのか、それは様々だろうし、私には断言できない。しかし、そこには間違いないしつかりと「生きて

いる人間」が居て、それを実感できる。「生きている人間」を感じる為、「自分も生きている人間」である事を感じる為に、スペースベンに足を運んでみてはいかがでしょう。人をつき動かす何かを感じられるかもしれません。

FANS 一人芝居マンズリー

『DD2H+C』

●一月毎金曜日 午後七時半より

●各公演 五〇〇円

企画・制作／創造集団パノラマ屋
協力／スペースベン

一月五日（金）「愚者の楽園1」

出演・田中勉 作・L

FANS 第百回を記念して、代表作から七作目の一人芝居を演じる。上演後新年会もあり。

一月十二日（金）「月窓」

作・出演 山咲紗里

こちらも我楽多屋看板女優の一人。舞台経験は比較的少ないが本番の強さは定評あり。初の自作自演。

一月十九日（金）「声の娼婦」

出演 宮崎 睦子

作・演出 長尾 広海

イージーシアター我楽多屋（七月に本公演を予定）看板女優の一人。長年連れ添った長尾広海とのコンビで初の一人芝居に挑む。

一月二十六日（金）「愚者の楽園2」

出演・安達良春 作・L

創造集団パノラマ屋お頭。ヘビーでコミカルな作品創りを目指す。これが四作目の一人芝居。



サルドモヨ、ネチヲマケ。